



## 3泊4日砂漠ツアー—遺跡、そして静寂の月明かり

丸紅 トリポリ出張所 水島 健樹



市街地のコリンチアホテルから街を望む。

二〇〇八年二月一六日英国航空八九八便でリビアにやってきました。トリポリ空港に降下するにつれて、日差しが眩しさを、緑の少なさを、そして低層の四角い建物が目立ったことを未だに憶えています。そんなリビアも最近では中層マンションや複合商業施設の建設ラッシュ。今年四月には、トリポリ動物園の裏手に、二階建ての緑に囲まれた瀟洒なトルコ系ホテルがオープンしました。

さて、リビアには四つの見どころがあるといわれています。東部のギリシャ遺跡、トリポリタニアのローマ遺跡、古来交通の要衝として栄えた西部ガダメス、そして砂漠。「チーム水島」も、三泊四日の砂漠ツアーを体験したので紹介します。

トリポリから飛行機で南へ一時間のセブハ空港。旅の出発はここから始ま

ります。到着の翌朝、四輪駆動車二台を連ねて、出発。見渡す限り、砂漠・砂漠・砂漠。人も車もなく、電話も繋がりません。細かい柔らかな砂にタイヤがのめり込み、立ち往生することもしばしば。靴など履いているのは無粋です。裸足が最高。ひんやりとした足裏の感触は、何とも心地いいものです。そして、今から二年以上も前、森・林などの緑に覆われ、キリン・猿・ワニ・サイが生活していた名残の地「マツケンドッシュ」。動物がくつきりと岩に刻まれ、雑然とありのままに、そこそこに岩が積み上がっています。さらに、砂漠の奥に進むこと数時間。ムルズク砂漠のど真ん中、誰もいない砂山の影にテントを設営。灌木の端きれで起こした火を囲みながらコックが用意してくれたりビアンスूप、リビアンサラダ、ク



ガダメスにて、砂漠が延々と続く



マツケンドッシュの岩絵



気温がぐっと冷え込む朝方。満天の星の彼方に朝日が昇る。

スクスを美味しく頂く。月光と星明かりだけが頼りの夜。音もなく、何もさえないものが無い茫漠とした空間がどこまでも続きます。北斗七星が時計と反対回りに目近に見えます。

「寂として 七星巡る 春さばく」

翌朝、砂山の尾根に駆け上がって、昇る朝日のパワーを存分に浴びます。素晴らしいの一言に尽きます。人間のちっぽけさを感じる瞬間です。またマフオー・ウンメルマー・ガブロン・マンダラのおアシスは湖面が鏡のように反射して美しく一見の価値あります。

ポテンシャルのあるリビアで、他社の一歩も二歩も先を行く丸紅でありたいと思うこのごろです。